

## 乱視読者の読んだり見たり

### 第3回 ジーン・ウルフの“Suzanne Delage”を読む

若島正

Tadashi Wakashima

前回の「取り替え子」に続いて、今回もまたジーン・ウルフの話をさせていただく。取り上げるのは、“Suzanne Delage”という短篇である。

この作品は、一九八〇年にアーシュラ・K・ルゥグインとヴァージニア・キッドが編んだオリジナル・アンソロジー *Edges* に載り、後にウルフの短篇集 *Endangered Species* (一九八九) に収録された

ごく短いものである。遠藤裕子えんどうゆうこによる邦訳が『ナイトランド・クオータリー』誌の第20号に「シユザンヌ・ドラジュ」という題名で掲載されているが、この人名の表記には後で説明するように微妙な問題があり、ここではあえて「Suzanne Delage」という原綴りのままで表記するのでお許しいただきたい。この作品を取り上げる理由は、一見すると「取り替え子」ほど複雑な物語には思えないが、これまでに提出された解釈はまさしく百花繚乱の様相を呈していて、これという決定的な解釈には至っていないように見えるからだ。つまり、誰にでも簡単に読めそうに見えて、本当に簡単な物語なのかという点で、ウルフ読者にとっては絶好の試金石になる作品なのである。

最初に、この物語のあらすじを手短かに紹介しておく。名前が与えられていない語り手は、これまで二度の結婚に失敗した、自分でも認めるほどの退屈な男である。その語り手は、ある晩に本を読んでいて、どんな人間でもとんでもない体験をしたことがあるものだという一節に出会い、自分のような平凡な人間にもそれが当てはまるだろうかと自問してみても、ようやくSuzanne Delageという女性のことを思い出す。語り手はこの女性と同じハイスクールに通っていたはずだが、会った記憶がなく、顔も思い出せない。学校のアルバムを調べてみても、彼女が写っているはずの写真は誰が誰だかわからない集合写真だったり、ページが切り取られたりして、顔が確認できない。しかし彼女の母親は

語り手の母親と親しい関係にあった。語り手は、この物語を綴っている数日前に、幼い頃からの知り合いである女性と道でばったり出会って言葉を交わす。そして別れ際に、十五歳くらいの女の子が脇を通り過ぎる。語り手はその女の子に思わず目を奪われるが、知り合いの女性は、その女の子が Suzanne Delage の娘で、母親そっくりだと教えてくれる。

物語はそれだけである。えっ、本当にそれでおしまいなの、と思っでしまっそうだ。

正直なところを告白すると、わたしはこの短篇を初めて読んだとき、おもしろさがさっぱりわからなかった。それが、最近になって再読してみて、そうだったのか！ と膝を打った次第である。

訳者の遠藤裕子は次のように書いている。

ある男の、本当かどうかもわからないような思い出話。この一見とりとめのない小さな物語を、英語圏の読者はどんなふうに残っているのだろうかと探ってみると、豊かな想像力を駆使したさまざまな解釈が披露されていた。きつちりと理詰めなものから驚くほど大胆なものまで、誰もが楽しんでそうに持論を展開している。ウルフが書いた言語のまま読む人たちのカラフルな解釈を見て、日本語の読者もまた思いのままに想像（創造）の翼を羽ばたかせられるよう、余計な色をつけず、でき

るかぎり足すことも引くこともなく訳そうと肝に銘じた。ちよつと不思議な青春時代の思い出話として受けとめるもよし、幽霊譚として読むもよし、ただの妄想と片づけるもよし。訳者としては、読者の方々がどんなふう読んでくださるのか、興味津々である。思い切り自由に、好きなように読んでいただきたい。

訳者が言うとおりに、これまでに提出されてきた解釈は実に多種多様である。ヘンリー・ジエイムズの短篇をもとにした幽霊譚とする説、*Suzanne Delage* = 吸血鬼という説、クローン説、『白雪姫』が元ネタになっているとする説、天然痘説などなど。こうして諸説を書き写すだけでも思わず笑ってしまうほどで、そのそれぞれをここでくわしく紹介するつもりはない。こうした過去の解釈は並立することがなく、そのためにコンセンサスは生まれていない。ただ百家争鳴という状況なのである。

しかし、こうしたバラバラに見える解釈群には、共通した特徴がある。それは、この短篇をそのまま読めばおもしろくないので、その物語の空白部分に「カラフル」な色を塗ろうとしている点である。読者が思い思いの色塗りをして楽しむこと、はたしてそれがこの短篇の豊かさを裏打ちしてくれるのだろうか。テキストの表面上はとんでもないことがなにも起こっていないように見えるから、こうし

た解釈群はそこにとんでもないことを解釈として書き込んでいるようにしか思えない（たとえば吸血鬼説や、クローン説を見よ）。もうひとつ、こうした読者たちに共通しているのは、いわゆる「信頼できない語り手」という概念を所与のものとして受け入れ、ウルフのテクストのあちこちを疑ってかかろうとする態度である。たとえばマーク・アラミニが主張している天然痘説は、語りにはしば見られる逡巡しゆんしゆんから、語り手はかつて Suzanne Delage に対して恐ろしいことをしてしまい、その記憶を抑圧しているのだと読む。

わたしは昨年、ウルフの代表的な中篇「アメリカの七夜」を読む論考を『SFマガジン』誌に発表した。その中心的な論点のひとつは、読者がさまざまに誤読を誘われるのは語り手の戦略によるものであり、そうした誤読はすでに語り手によってテクストの中に意図的に埋め込まれているというものだった。しかしそれは、語り手が作者として物語を紡ぎたいという欲望を持っているからであり、そうした誤読を生み出す装置としての作品という仕掛けは、この“Suzanne Delage”という短篇にはまったく当てはまらない。なぜなら、この名前を持たない語り手は退屈で凡庸な男であり、とんでもない物語を紡ぎたいという欲望を持っていないからである。そういう語り手が語っているのだから、この短篇がさしておもしろくもない平凡な物語に見えてしまっても仕方がない。



一般論を言ってしまうと、どんな小説であれ、読者はまず語り手の言葉をそのまま受け入れるべきである。もしそこに明らかな矛盾や隠されている意匠がうかがえるとき、そこで初めて「信頼できない語り手」という可能性が生じる。どうもウルフ読者はおしなべてこの当然の前提を忘れていのではないか。

私見によれば、「Suzanne Delage」の語り手はべつに信頼できない語り手ではない。彼の語りにはどこも嘘はなく、意図的に隠蔽された空白もない。要するに、読者はこの物語をそのまま受け取ればいいのである。ここにはなにも過不足はない。そして、わたしが初読のときに感じたように、この虚構世界内ではとんでもないことはなにも起こっていない。

それでは、さしたることがなにも起こっていないような小説の、いったいどこがおもしろいのか、と当然突っ込まれるだろう。それが実はおもしろいのだ。

この短篇をどう読むか。その大きなヒントは、書き出しにある。

昨夜、本を読んでいて（……）その著者の言葉が心に残った。読んだ当初、わかり切ったことだがそれでもなかなかおもしろい、と感じた程度のその考え方は、あとになって、つまりはそのペー

ジをめくり、さらに何ページも読みすすめ、次の章の真ん中を過ぎて、それまでの内容とあまり関係のない箇所になってから、ふたたび僕の意識下によみがえり、心と本のあいだで一種のフィーターとして作用し、僕は本を置いてからもずっとそのことについて考えながら、床についた。

「子供のころ、デイヴィッドとわたしとは眠かろうが眠くなかろうが早くベッドに入らねばならなかった」という『ケルベロス第五の首』の書き出しが、ブルーストの『失われた時を求めて』の有名な書き出しを模したものであることはウルフ読者の常識になっているが、“Suzanne Delage”の書き出しについても同じことが言えるという明らかな事実を、これまで誰も指摘したことがないのは不思議としか言いようがない。ただ、『ケルベロス第五の首』の書き出しと違ってここで強調されているのは、『失われた時を求めて』にも「私はまだ手にしているつもりの本をおき、明りを吹き消そうとする。眠りながらも、たったいま読んだことについて考えつづけていたのだ」とあるように、語り手が就寝前に本を読んでいること、つまりは**読書体験**である。

さて、『失われた時を求めて』がこの短篇の書き出しに（おそらく語り手が意識することはなく）存在しているという事実を読みにもどう役立てればいいのか。ただ記憶をテーマにする作品だからとい

うのでは漠然としすぎる。そこで『失われた時を求めて』を実際に読んでみて、そこに具体的な手がかりを求めようとする読者は、おそらくごく少数だろう。なぜなら、『失われた時を求めて』は調べするには長大すぎるからである。しかし、その具体的な手がかりはたしかに『失われた時を求めて』の中に存在している。それをわたしたちが自力で見発見しようと思うと、たぶん長い年月が必要になるはずだ。その長い年月を端折って、ここで超ウルフ読者の一人であるマイケル・アンドレードリウツシが見つけた答えを紹介しておこう（それにしても、どうやって見つけたのだろうか）。

『失われた時を求めて』第三篇「ゲルマントの方」Ⅱの第二章で、アルベルチーナが語り手の家庭や社会的環境のことを話題にして、「あなたのご両親は、とても立派な人たちとお知り合いなのよ。あなたは、ロベール・フォレスチエや、シュザンヌ・ドウラージュのお友だちなんだわ」と言う。しかし語り手には心当たりがない。

シュザンヌ・ドウラージュの方はといえば、彼女はブランデ婦人の姪めいの娘で、わたしは彼女の両親の家に一度ダンスのレッスンに行くことになっていたし、サロンで演じるお芝居でちよつとした役をやることにさえなっていた。けれども、こらえきれずにぶつと噴き出すのではないかと心配に



なったり、鼻血を出したりしたために、それはとりやめになり、そんなわけで私は一度も彼女に会わなかったのだ。せいぜい私は、スワン家の家庭教師で帽子に羽飾りをつけた婦人が、以前にシュザンヌ・ドウラージュの両親の家に行ったと聞いたような気がしたが、ことによるとそれは、この家庭教師の姉か友だちのことだったかもしれない。私はアルベルチーナに向かって、ロベール・フォレスチエとシュザンヌ・ドウラージュなど、私の生活とはほとんど関係のない人たちだと抗議した。「そうかもしれないわ。でもね、あなたたちのお母さま同士がおつきあいしてるのよ。そのために、あなたが格づけされるんだわ。わたし、よくシュザンヌ・ドウラージュとメシーヌ大通りですれちがうけど、あのひとつたら、そりゃあシツクよ」

アンドレ・ドリウツシのこの発見によって、Suzanne Delage という名前が『失われた時を求めて』の登場人物からの借用だという事実は、ウルフ読者に広く共有されている。しかし彼らが気づいていないのは、『失われた時を求めて』とウルフの短篇における、シュザンヌ・ドウラージュと Suzanne Delage をめぐる状況の共通性というか、一致である。

『失われた時を求めて』では、語り手はシュザンヌ・ドウラージュに一度も会ったことがない。彼女

に会ったことがないので、語り手は彼女の顔を描写することができず、そのために読者はシュザンヌ・ドゥラージュという女性の姿かたちをほとんど思い描くことができない（唯一の手がかりは、「シック」だというアルベルチーヌの証言だけである）。そしてまた、シュザンヌ・ドゥラージュというきわめてマイナーなキャラクターが言及されるのは『失われた時を求めて』全篇の中でもこの一個所しかないので、どんなに注意深い読者でも彼女の存在を忘れてしまう。それでも、シュザンヌ・ドゥラージュというキャラクターは『失われた時を求めて』の虚構世界の中に、たしかに存在しているのである。このシュザンヌ・ドゥラージュをめぐる状況が、ウルフの短篇における Suzanne Delage をめぐる状況とぴったり一致しているわけだ（本人同士ではなく、母親同士が仲のいいつきあいをしているという共通点にも注意）。唯一の違いは、『失われた時を求めて』ではドゥラージュ家とのつきあいがあるということが立派な家柄の証拠という「格づけ」がされているのに対して、ウルフの短篇ではむしろ Delage 家とつきあいがあるのを不名誉だと考えている人間がいることで、これはしばしばウルフの作品に見られる、逆転を伴った引用の技法である。

わたしは「この虚構世界内ではとんでもないことはなにも起こっていない」と書いた。それは嘘ではない。しかし、メタレベルでは、『失われた時を求めて』の虚構世界に存在していたシュザンヌ・

ドゥラージュというキャラクターが、いわば時空を超えて、別の時代のアメリカに設定されたこの短篇の虚構世界に出現しているという、とんでもないことが起こっているのだ (Suzanne Delage という名前は、アメリカでは「スザンヌ・デラジ」と発音されている可能性が大きく、翻訳でどちらの表記にするかは難しい問題である)。退屈な男である自分でもとんでもない体験をしたことがあるのかもしれない、という語り手のぼんやりとした想像は、実は正しいのだが、もちろん『失われた時を求めて』を読んだことのない彼にはその真相を知る由もない。本当のことを知っているのは、この虚構世界を超越したレベルにいる、わたしたち読者だけである。

まとめてみれば、“Suzanne Delage” という短篇は、『失われた時を求めて』という小説の読書体験を形象化した物語である。これはいったいどういう話なんだろう、と首をひねるばかりで投げ出した読者は、それから何年か経って、『失われた時を求めて』を読んだ (あるいは再読した) ときに、シュザンヌ・ドゥラージュというマイナーなキャラクターに出会い、はてな、この名前にはどこかで見覚えがあるぞ、と思い出すかもしれない。そしてもしかすると、このウルフの短篇を思い出して、そのときによくやくすべてを理解するかもしれない。さらに言えば、この読書体験はなにも『失われた時を求めて』に限らない。わたしたち読者がどれほど愛読している小説でも、シュザンヌ・ドゥラージュ

ジュのように、顔かたちも定かではない、存在していることすら忘れてしまったキャラクターがいるのだ。

そういうわけで、この短篇が "Suzanne Delage" としか題しようのない、まよしく Suzanne Delage の物語であることがご理解いただけたかと思う。ただ問題なのは、この短篇の中心となる Suzanne Delage が、顔かたちのさっぱりわからない空白でしかなく、読者にとってはイメージがつかめないことだ。この欠落は、短篇にとって大きなマイナスになる。だからといって、作者は語り手を Suzanne Delage に合わせるわけにはいかない（そうすると物語の前提が崩れてしまう）。そこでウルフはどうしたか。

小説の結末部分で、語り手は通りで十五歳くらいの女の子を目にする。これもまた『失われた時を求めて』で、アルベルチーヌがシュザンヌ・ドウラージュとメシーヌ大通りでよくすれちがうという、その部分の変奏である。


少女の髪は艶のある黒で、肌の色はミルクのように真っ白だった。しかし、つかのま僕を魅了したのは少女の髪や肌ではなく、柔らかなアンゴラのセーターにぴたりと貼りつくのを恐れているか

のような幼い胸ではなく、僕の両手でぐるりと包み込めそうな細い腰でもなかった。それはむしろ少女のまとうはつらつとした、のんきさと内気さが同居する空気感であり、そこにあどけなさ聡明さが結びついて、独特の雰囲気醸し出していた。

そして語り手は、この女の子が Suzanne Delage の娘で、母親そっくりだと教えられる。つまり、ウルフは Suzanne Delage を直接に描写することなく、母親にそっくりな彼女の娘（ただし、どこがそっくりなのかはわからない）を描写することで、間接的な近似描写をしているのである。そしてまた、この間接的な描写は、アルベルチーヌのシユザンヌ・ドウラージュに対する「シツク」という評にも合致している。こうしてわたしたち読者は、シツクではつらつとした Suzanne Delage を自由に思い描くことができるのだ。もし直接的な描写をすれば、それは顔かたちもわからないままのシユザンヌ・ドウラージュに恣意的な色塗りをしてしまうことになり、『失われた時を求めて』に対する冒瀆行為ぼうとくになったかもしれないが、ウルフはそれを巧みに回避した。

この短篇は単一のアイデアからできた、簡単な仕掛けの話であり、この結末がなくても成立している。しかし、ウルフはおそらくアルベルチーヌの言葉からヒントを得て、語り手が Suzanne Delage の



娘と出会うという場面を結末に書き加えた。この短篇の最後に来る言葉は、題名と同じ、“Suzanne Delage”である。Suzanne Delageとは誰でしょう、という作者からの謎かけ。その謎は読者の記憶にとどまりつづけることだろう。わたしはただただ、小説家としてのウルフの技量に舌を巻かざるをえない。 

#### 使用文献

Gene Wolfe. "Suzanne Delage." *Endangered Species*. TOR Book, 1989. 361-67. 邦訳「シュザンヌ・ドラージュ」、遠藤裕子訳、『ナイトランド・クォーターリー』vol. 20、二〇二〇年、62―67頁。

マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』6 第三篇『ゲルマントの方』、鈴木道彦訳、集英社文庫、二〇〇六年。